

## 《巻頭言》

# 東日本大震災に思う

統括学系長

西川 和明

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は本県を含む東北地方の3つの県に甚大な被害をもたらした。本県では、震災のみならず福島第一原子力発電所の事故による放射線拡散という被害を受け、住み慣れた家と町から避難を余儀なくされたり、丹精込めて栽培した米から基準を超える放射線物質が発見されて売ることができないなど、多くの方が様々な被害を受け、いつになったらそのような不安が解消するのかさえ未だにわからない状況にある。

警察庁が今年2月に発表した東日本大震災による死亡者は15,846人、行方不明者が3,321人である。被災3県ではこうした被災者に加えて原発避難などで人口が6万5千人減少した（平成23年12月を3月と対比）。命が助かっても多くの方が仮設住宅などで不自由な生活を送っている。

私が代表を務める経営戦略研究会の会員であり、南相馬市に住んでいた矢野馬光男氏は3月11日の津波で家族3名ともに行方不明となり、その後5月になって遺体が発見された。矢野馬氏は南相馬の地域づくりに一生懸命携わっていた方である。一緒に東京の街を調査していた彼が、半年後には帰らぬ人となってしまった。告別式に4名の遺影が並んでいるのを見るにつけ、震災・津波の残酷さをまざまざと感じた。

わが国でこれほど多くの方が亡くなり、また家などの建物や財産が失われたのは第2次世界大戦以来である。67年前、空襲によって焦土と化した日本から、「鎮魂」と「復興」の二文字を背負って多くの人たちが日本を再生して来た。私が2000年まで勤務していたジェトロ（日本貿易振興機構）で1983年から6年間理事長を務めた赤澤璋一氏（2002年に逝去）もその一人である。赤澤氏が乗艦する戦艦「比叡」は1942年11月第3次ソロモン海戦において、ガダルカナル島沖で米軍の猛攻を受けて沈没した。赤澤氏はその生き残りの一人で、九死に一生を得た赤澤氏は戦後、通産官僚として日本産業の復興に尽力した。中でも「YS-11」の開発は特筆に値する業績と言えるもので、NHKの人気番組であったプロジェクトXでも取り上げられた。赤澤氏は1955年に航空機武器課長に就任するや、「今のままだと日本の航空機産業は衰退する」と考え、翼をもぎ取られて全国に散った航空技術者を招請した。そして着手したのが戦後初の国産旅客機の開発であった。その過程で、飛行機的设计を全くやったことのない若者たちが徹底的に「オン・ザ・ジョブ」で鍛えられ、こうした若手設計者たちがYS-11完成後は出身企業である重工業や機械メーカーに戻り、日本の産業発展に大きく貢献したことは言うまでもない。

15年程前のことであるが、私は南太平洋諸国への経済交流ミッションでの団長である赤澤氏に同行し、赤澤氏の乗艦する戦艦「比叡」が沈没したガダルカナル島のあるソロモン諸島などを訪問したことがある。私は秘書的な役割を仰せつかり、まさに寝食をともにしながら赤澤氏から多くの薫陶を得た。赤澤氏がよく言われていたのは「今の日本の繁栄は戦争中に亡くなった多くの人たちの魂で支えられている」ということであった。多くの死を無駄にすることではなく、まさに「鎮魂」と「復興」の二文字を胸に、戦後の日本の産業発展のために粉骨砕身で取り組んで来たと言うことができよう。

赤澤氏だけでなく多くの方々が様々な場で「鎮魂」と「復興」の精神で日本を世界第2位の経済大国に押し上げてきたと思っている。

本学には震災後の復興支援を担う「うつくしまふくしま未来支援センター」が設置された。民俗学者の柳田國男は著書の中で「美しい村などはじめからあったわけではない。美しく生きようとする村人がいて、村は美しくなったのである」と書いている。矢野馬氏のように「美しい福島で生きよう」との思いを持ちながら亡くなって行った多くの人々の無念さも、「うつくしまふくしま」にこめられていると私は思っている。

今の福島県の置かれた状況は、どこから手を付けたらいいのか、また、自分は何をしたらいいのかわからないような混沌とした状況であると言って過言ではない。しかし、犠牲となった県人に対して鎮魂の念を持つことは、少なくとも「あなた方が大切にしてきた県土を復興させて子孫に残していく」という誓いを新たにすることだと思っている。